

## 6 成果と課題

---

## 拠点形成の成果

海外パートナー拠点との連携ネットワークが整備されたことにより、アジア地域内およびそれを超えて広がるグローバルな教育研究の協力体制の基盤が構築できた。さらに、このネットワークを活用した次世代研究者による共同研究も始まっている。本事業によって、海外パートナー拠点も活性化し、学部生の交流の提案、共同研究プロジェクトの提案などもされ、アジア地域内のアカデミックな交流が活発化した。

人材採用においては、COE 教員・研究員を公募し、本学以外の出身の、特に海外での大学院教育や博士号取得の経験のあるスタッフを迎えることができ、学生にもよい刺激を与えている。事務局においても、全員が英語に不自由がなく韓国語、フランス語にも対応できる、世界的拠点にふさわしい人材を採用することができた。

## 教育成果

教育面では、国際交流を中心としてグローバルな人材育成をめざすとともに、次世代研究者の自発的研究を支援した。

アジア版エラスムス・パイロット計画による次世代研究者および教員の交換が活性化し、将来のアジア版エラスムス実現への足がかりができてきた。

大学院生・PD・研究員等が、次世代ワークショップでの英語発表や司会・運営、英語論文執筆、海外学会での発表、国際セミナーのオーガナイズなどの経験を積むことにより、国際的な舞台で活躍する実力と自信を飛躍的に高めた。

研究科横断的な拠点形成により、大学院生・PD・研究員等の研究科を超えた日常的交流が生まれて、学際的な研究プロジェクトや研究会も誕生している。

次世代研究プロジェクトの募集に対し、大学院生・PD・研究員等が非常に積極的に応募して、国際的・学際的なネットワーク力を駆使した企画力を磨くことができた。

## 研究成果

研究面では、隣接関連分野による学際的協業、国際比較、研究の実用性という点からアプローチをおこなった。

社会学、政治学、経済学、地域研究といった領域の学際的な結合により、家族を中心とした親密圏のありかたが、福祉国家や社会政策の枠組み、労働市場のありかた、国際労働移動のパターンなどの組み合わせにより規定されている具体像がさまざまな角度から浮かび上がってきた。

アジア諸社会を比較対照することにより、東アジア・東南アジアの多様な諸社会に、共通のトレンドが生まれていることが分かってきた。女性の主婦化、家族主義福祉レジームと国際労働移動の結合、人的資源への投資という考え方の普及などである。国際的な連携により国際労働移動の送り出し地域と受け入れ地域を対にして見ることの重要性が明らかになった。リーディングス編集の過程で、アジア地域の研究者が互いの社会について表層

的な知識しか持っていないとことが確認できた。階層差、中国的伝統とインダ的伝統の影響、性規範の違いなどが重要な論点であることが見えてきた。「アジア」の地域的共通性の形成にメディアが果たしている役割の大きさが確認された。

親密圏と公共圏という枠組みでとらえにくい「コミュニティ」という概念がもつ可能性が、理論研究からもフィールド研究からも照らし出されてきた。

大学の男女共同参画についての調査研究では、女性研究者や女性医師の問題とされてきたことは、実は男女に共通する働き方の問題であることが指摘された。

## 今後の課題

2008年度は初年度であり、運営組織の整備や人材採用などの準備のために本格的な研究、教育活動は実質的には半年間しかなかったことを考えると、十分な成果があったと考えられる。しかし、組織体制がフルに稼働したと言いがたい側面もあった。

人材公募や研究公募などを優先したために、拠点運営のための諸規定の一部については、スタート時から制定できなかったものもあった。そのために、拠点の全体像が外部から理解しにくい面があったようである。

本拠点ではNGOなど大学・研究機関以外の人々の連携も視野に置いているが、キーワードとした親密圏・公共圏は一般にはなじみのない言葉でもあったこともあり、拠点への理解が得られないこともあった。ニューズレターや出版などの広報活動が出遅れたことも一つの原因であったと言える。とくにホームページの本格的な運用が遅れ、講演会、研究会などの情報告知が十分でなかった部分もあり、活動の周知がはかれなかった。これらの状況を受けて、情報伝達については情報ネットワーク委員会が11月頃よりホームページを中心として広報活動の見直しに着手した。その結果、改善される見通しがついてきたが、さらに反省点を共有しながら体制づくりを進めていく必要がある。

次世代研究者の本拠点に対する理解を深めていく必要があると考えられる。6研究科2研究所による横断型の体制のために、対象とする学生も多く、十分な理解がはかれなかった部分もあった。次世代研究者が本拠点の趣旨を十分に理解した上で、教育や研究などに参加してもらうことによって、次世代研究者の効果的な育成につながると考えられる。

しかし、持続可能な拠点形成をめざすためには、拠点運営について内部からも外部からも検討していく必要がある。外部評価について、アドバイザー委員会から改善点等を聴取した。内部については、運営委員会、拠点委員会、各委員会において改善点を踏まえながら運営をおこなっている。次世代ワークショップや国際シンポジウムなどについては、終了後に反省会をおこなって、次回への改善につながるように配慮をしている。

